

草双紙合巻から新聞小説へ

——開化期文化の底流——

本 田 康 雄

要 旨 江戸時代以来、草双紙合巻の作成に従事した作者（戯作者）や画工（浮世絵師）は明治七年、難解な新聞記事の中から特に一般庶民に興味のありそうな雑報記事を選び浮世絵師・落合芳幾などを中心として分り易く絵解きして新聞錦絵（木版）を刊行した。その経験を生かして芳幾、高島藍泉（三世柳亭種彦）は翌明治八年、平仮名絵入新聞を工夫し雑報欄の中央に木版の挿絵（事件の現場のスケッチ）を組みこみ、鉛活字の報道文と組合せて草双紙風の紙面を構成して多くの読者（江戸時代以来の草双紙の読者層）を獲得した。この欄において所謂、三面記事の連載、続報が生じ、これを続き物と称した。この様な小新聞（タブロイド版の大衆紙）の流行をみて新聞ニュースを直ちに草双紙合巻にまとめた『鳥追阿松海上新話』『東京奇聞』『高橋阿伝夜刃物語』が刊行され、末期草双紙界に最期の火花を揚げたが、間もなく新聞の（絵入り）続き物の人気に吸収され、江戸以来の草双紙合巻は明治二十年頃、途絶えた。しかし、この間、戯作者、高島藍泉、染崎延房（二世為永春水）等は小新聞の続き物の記者として草双紙の文章に基づき報道のための新しい文体を工夫して庶民の読者に読み物を提供し、また浮世絵師はこの三面記事の中央部に事件の挿絵を描い

て絵画による情報提供に努めた。この様にして、戯作者と浮世絵師の新聞を媒体とする協力によって続き物は盛行し、続き物の延長上に新聞小説が成立した。国際的に珍しい日本の新聞小説の形態（絵入り続き物語）は明治のはじめから昭和の今日まで変っていない。

明治のはじめ、三面記事、雑報欄中心の小新聞に登場した「続き物」が新聞小説へ成長する過程についてはすでに興津要氏の数々の論考が発表されている。^①このテーマは近世から近代への文芸、文化の継承あるいは断絶の状況を最もよく示しており、興津氏が名付けられた『転換期の文学——江戸から明治へ——』という書名の意図するところの中心に置かれていてと考えても大きな誤りはなからう。テーマが重要であるだけに、各方面から多様な検討がなされることが望ましい。本稿もその一であって件の新聞紙の紙面をあらあら眺め、その形態、挿絵との関係などに注目した小論である。

一 続き物について

「……つい数年前までは、新聞社員は、おのれの新聞が連載している『小説』を小説とはいわずに『続き物』といっていた。毎日続くから「続き物」にはちがいないが、これは大作家の『名作』に対して、なんと礼を失した呼び方であることか。……」と高木健夫氏は延べている。『新聞小説史稿 一』昭和三十九年四月、三友社刊。「著者後記」近代文学の中枢をなす「小説」が我が国では新聞小説の形で成立、普及し一流の小説作家と挿絵画家がこの種の新聞原稿を制作し、新聞記者が編集して、今日もますます盛んである。この続き物の発生と近代小説の成立との関係についてはすでに定説があつて、その要点をまとめれば次の様になる。

続き物の嚆矢は明治八年十一月二十八日から三十日まで「平仮名絵入新聞」^②に連載された「岩田八十八の話」とされる。小新聞の雑報記事の連載のはじまりという点を考えるとこの指摘は正しい。話の筋は

岩田八十八は浮気な女房を斬って逃亡し身延山で自殺しようとするところを僧にとめられる。罪滅しのため諸国を巡礼したが十数年を経た明治維新後、捕えられて懲役八十日に処せられた。

……というのである。続いてこの種の連載記事は興津要氏が指摘する様に「仮名読新聞」に明治九年三月二、四、十、十二日と連載された横浜の小僧ごろし事件——横浜のある商店の丁稚が主家の金を銀行に持ってゆく途中、顔みしりの男に殺され金を奪われた話、「東京絵入新聞」の明治九年四月二十六、七、八日、三日間の華族の家とその妾との裁判沙汰、「仮名読新聞」の九年十月四、五、六日の「女盗賊お常の伝」など各新聞に散見される。このような報道、雑報記事の連載の中に事実の報道に加えて物語性、伝奇性が加わって、それが新聞小説へ進んでゆく過程を示すものと解釈することも可能である。この意味で、明治十年十二月十日（五百四十号）から十一年一月十一日（五百六十二号）にかけての十四回、「仮名読新聞」雑報欄に連載された「鳥追阿松の伝」は続き物の記事としてははじめて草双紙合巻『鳥追阿松海上新話』（三編九冊、各冊九丁³。仮名垣魯文撰、久保田彦作著、陽州斎周延画。）として明治十一年一月に刊行されただけに、物語性のある続きものとして先ず第一に注目すべきであろう。以下、草双紙合巻になった続き物を列挙すれば、「さきかけ新聞」の明治十一年五月二十八日（三百廿号）から連載された「毒婦阿衣の伝」は評判がよいので完結しないうちに六月に『夜嵐阿衣花酒仇夢』（芳川俊雄撰、岡本勘造著、永島孟斎画）として金松堂・辻岡文助から出版された。また翌十二年二月に競合する形で出版された仮名垣魯文著『高橋阿伝夜刃譚』（八編二十四冊。守川周重画。二月十四日——四月二十二日刊。版元は金松堂・辻岡文助）と岡本勘造著『東京奇聞』（七編二十二冊。桜齋房種画。二月十一日——四月上旬刊。版元は島鮮堂・綱島亀吉）はいずれもこの年一月三十一日、東京裁判所において斬罪申付けられ同日、処刑された高橋阿伝、本名高橋でんに関する速報の続き物を編集したもので、この二作によって所謂「毒婦もの」が文芸として確立した観がある。

一方、「東京絵入新聞」に前田香雪（柳田泉は二世為永春水を擬している）が連載した「金之助の話説」（明治十一年八月二十一日——二十八日。九月三日——十二日。計十六回。）が評判をとった。その梗概は

金之助は東京新右衛門町の道具屋の次男で美男であった。年頃になつて放蕩がはじまり吉原で遊びまた教寄屋町の芸者小蝶になじんで家を勘当される。一時は金につまつて自殺しようとしたが、小蝶に励まされ大阪へ出て成功しようと旅立つ。しかし供をした悪番頭にだまされ一文無しとなる。苦境に陥つたところを以前から交際のあつた北の新天地の芸者小龍に助けられ西京新聞の呼び売りとなつて自活する。その堅気の生活が東京にも伝わり親許から勘当を許される。そこで、小龍とは礼を厚くして別れ、東京へ帰つて小蝶を妻として商売に励む。

この「金之助の話し」が雑報記事の続き物として評判をとり、以後、各小新聞の雑報欄にこの種の続き物がますます定着していった。

二 続き物の発生

「続き物」とは以上に述べてきたように小新聞の雑報記事の連載、続報を指す。「金之助の話し」の場合も十六回の連載で、それぞれ記事の文末に「……怒を含む一段はまだ長ければ明日委しく」「……又金之助が困難の嘶しは明日までお預かり」等とあり、また記事の冒頭は「既に前にも説如く……」「既に前号にも言ふ如く伶俐なやうでも金之助は……」となつてゐる場合が多い。もつとも「……烟草入を我が腰へ差す所までは彼地の通信者から報告がありました故跡は又探訪の上再び通信のありますまで一寸幕を引ますから看官どうぞ其お積りで」などはそのわざらしいオーバーな書き方に微笑まれるが、現地からの続報を待つという新聞記事の基本を種にした洒落であらう。

いづれにしろ一回毎にまとまつて読める様になつてゐるのと同時に雑報記事としては前号を承け次号へ連なつてゆくのである。そして一回毎のまとまりの中心は記事の紙面の中央に掲げられた挿絵であつた。新聞である以上、ニュース報道が何よりも優先するのであるが、挿絵を入れるということになると、いわば報道の絵解きであつて、紙面か

ら受ける印象も絵が主、文は絵の説明のための補助的なものと感じられる。この挿絵を昨今の新聞報道の現場の写真と較べるのは短絡かも知れないが、しかし、現場のスケッチあるいはそれに相当する戯画と位置ずけてもそれほど大きな誤りではあるまい。いつてみればこの新聞の紙面から受ける印象は瓦版や草双紙と同様である。草双紙合巻の一場面、見開き一丁が小新聞の雑報欄の一廓に割って入った感じである。

この様な挿絵入り雑報記事の初見は、金属活字の紙面にはじめて挿絵の版木を組みこんだ「平仮名絵入新聞」(明治八年四月十七日、第一号刊)の創刊号においてであった。この新聞はタブロイド判四頁上下二段組み(一段は二十五字詰、十八行)の所謂小新聞で、創刊号の三頁下段にはじめて木版の挿絵を入れた。因に、新聞全体の編集は、「公聞」(おふれ)「雑報」(はなし)「投書」(なげふみ)「物価」(さうば)「広告」(ひやうめ)の各項よりなりそれぞれにいくつかの記事が列挙されている。「雑報」、つまり今日の新聞の三面記事の元祖にあたる社会記事、世俗世相の雑報記事は文字通り三頁(面)中心におさめられている。その中にもいくつかの項目があつて数行で済む記事もあるが、最も読者の興味を惹きそうな一項を選んでその記事の中央に木版の挿絵を組みこんだのである。(新聞全体で挿絵はこの一ヶ所である。)

「平仮名絵入新聞」第一号では二頁下段七行目より三頁を経て四頁上段一行目にわたる傷害事件の記事がそれにあたり、三頁下段四、五行目より最終行までが挿絵である。挿絵は犯人吉岡良太郎という散切り頭、書生風の美青年が料理屋の娘に大刀を大上段にふりかぶつて斬りかかるのを邏卒(後に巡查と改称——本田注)二名が捕えようとする図で、約十四行分を占めている。この記事全体が四十九行なので三十パーセント近くを挿絵が占めていることになる。

(梗概)鳥取士族、吉岡良太郎は二十一歳、町で評判の色男であつた。去年、神戸に来て吾妻菊という料理屋の娘、おふき、十七歳と深い仲となつた。良太郎はおふきに入れ揚げたが、さる商店の手代が大金を出しておふき

を手に入れようとし、おふきの両親またおふきもその気になる。嫌われた良太郎はこの日、吾妻菊へ斬込み、おふきの肩先を斬り、両親、下男に手を負わせる。すぐに選卒が駆けつけ、屋根の上で立廻りとなる。追いつめられた良太郎が火の見櫓にのぼって切腹しようとしたところに郷里の親友、大江利夫が来て説諭し遂に縄目にかかった。この事件は去年九月十三日のことであつたが、このごろ処分が決まつた。

結びに「なんと皆さんつゝしむべきは色でござる」の一文がある。明治版佐野次郎左衛門的一幕である。この種の挿絵と雑報記事が平仮名絵入新聞の人気を高めた。毎号工夫した挿絵と記事が掲載されたが、明治八年四月廿六日（第五号）の雑報を傑作として紹介しておきたい。この記事は二頁下段十二行目より三頁下段三行目にわたっており、三頁上段に大きな挿絵があつて女郎屋の座敷で布団を引解いて綿を出している男を大柄の女郎が掴まえて争つてゐる有様を大寫しに描いている。記事本文によると

小日向江戸川町に住む東京府士族吉田忠助は吉原の京町二丁目貸座敷、霜田敬蔵の店へ登樓して田毎という女郎をかつた。しかし、田毎はいつまで待つてもすっぱかして現れず、どうやら隣座敷へ入った模様である。忠助は腹が立ち、悶々として寝られないまま、この報復を考えた。そして、夜具の蒲団を持出して大門口に軒先からぶらさげてさらしものとしこの店を恥かしめようと思ひ付いた。ところが大布団で重くて運べないので引解いて綿は片隅へ隠し、布地だけを持出して、と懷に入れたところを田毎に見えられて格闘となつた。すぐに巡査が来てこの男は屯所へ引かれ禁獄四十日の刑を受けることとなつた。

器物損壊罪に該当したのかどうか、それにしても大布団を引解くとは念の入つたこと、苦心の程が思いやられる。この平仮名絵入新聞の挿絵は社主、落合（一惠齋）芳幾、文章は印務編輯長代理、高畠藍泉（三世柳亭種彦）の筆になるものであろう。高畠藍泉の文はやがて明治八年冬に入社した染崎延房（二世為永春水）が受継いだと思われ

る。篠田鑛造著『明治新聞綺談』（昭和十八年十一月、明正堂刊）に三品蘭溪翁が明治十六年の秋に、東京絵入新聞社へ入社した時の模様を書いた一文が紹介されている。この文章によると

……追々日数を経るに従ひ、無愛想であつた染崎老も、案外優しい老人であることを知つた。そして同老は、毎日午前十一時頃に出勤、前日下畫が出来てゐる受持の絵入物一章づつ書かれる丈で、執筆中、字句に支へたり、睡魔に襲はれたりすると、いつも懷中から四つ折の半紙を取り出して、その小隅を裂いて丁寧に紙擦（こより）をこしらへそれで耳の穴を穿るのが癖のやうであつた。その頃同老は「浅尾岩切真実競」について「小政の話」といふのを紙面に書いてゐた。……（同書の「東京絵入新聞社の編輯局」四七頁）

……という風に明治十六年頃染崎延房が「受持の絵入物」、絵入りの続き物を執筆している状況を描写している。この頃の記者の生體を高木健夫氏は野崎左文の回想にもとづいて次の様に述べている。

出社、午前十時。すぐにその日の「続きもの」一回分を十一時ごろまでに書く。——中略——そのころの作家は、ほとんど自分で挿絵の下絵を描くのが一般であつた。原稿を画家に渡して描いてもらう人もあつたが、たいがいその日の分の場面、時間、天気から人物の着物の柄とか、小道具までを指定した下絵を画家に渡した。画家はこの下絵があれば、原稿をみなくとも挿絵を描くことができる。——中略——「小新聞」の記者兼続きもの作家が出社すると、机の上にはおとといまわしておいた下絵を画家が版下に描き、彫り上つた版木が出来ている。作家はその版木の画面に合うように、メモをみながら、その日の一回分を二時間か一時間半以内に書くのだ。

（高木健夫著『新聞小説史、明治篇』——昭和四十九年十二月十六日、国書刊行会刊——29頁「続きもの記者の生體」）

作者が下絵を描く、というのは版本、特に草双紙合巻の稿本作成の場合を想わせる。江戸時代以来の伝統的版本作

成の方法で新聞の紙面を構成したのである。ただ、版木を彫るための下絵と金属活字で組まれる文章の原稿を別々に速成して組合わせた点が異なる。

篠田鑛造氏や高木健夫氏の述べるところによって続き物作者の執筆の状況がよく分る。しかし、作者の創作、物語である続き物の場合はこの通りであろうが、平仮名絵入新聞創刊号以来の単独の絵入り雑報記事は社会的事件の挿絵を中心に報道の戯文を書きこんだもので後述する「錦絵新聞」の場合と照合すると挿絵は一恵斎芳幾が直接、描いたものと思われる。草双紙合巻の稿本の様な作者の下絵はなく、芳幾がニュースのあらましを聞いて直接、版下画を速成したのではなかったか。高島藍泉や染崎延房はこの版下画を眺めて、その絵の周囲を埋める戯作調ではあってもあくまで事件の報道の新聞記事を作ったのである。庶民層の読者のための分り易い報道の文に戯作者の文章が生かされたのである⁽⁸⁾。作者の文章は直ちに金属活字に組まれて、芳幾の挿絵の版木と組合わせられる。作者は今日の新聞記者が三面記事の文章に凝るのと同様に潤色の多い戯文の記事を作成した。しかし、読者の興味の中心はむしろ芳幾の挿絵にあつて、絵と文と相補つてこの「絵人物」が平仮名絵入新聞の目玉となつたのである。

三 新聞錦絵について

平仮名絵入新聞が創刊された明治八年の前年、明治七年には新聞錦絵が人形町の具足屋から発行され評判を呼んだ。東京日日新聞中の記事、多くはいわば三面記事——刃傷、情痴、犯罪、珍説——を浮世絵に仕立てたのである。東京日日新聞は明治五年二月二十一日、條野傳平、西田傳助、落合芳幾が創刊した東京最初の日刊紙で明治六年には岸田吟香が入社して雑報欄に麗筆をふるった。この新聞創設の中心人物である芳幾自身が新聞錦絵の絵師となつた。東京日日新聞の新聞錦絵が評判をとると、これにならつて大蘇芳年の郵便報知新聞の新聞錦絵が錦昇堂から刊行され

た。その創刊号に

新聞の紙世に裨益し内外の事理相通じ遠近の人情相達して開化進歩に効あるは大擲つ幼兒だに善く知得て教示に就しむるの臺本^{だいほん}たれども唯人情事理は心に感ず可く思に考ふ可くして目に觸れ手に取る能^{あたは}ざるの憾あれば描きて以て之を諭^{さと}すの捷徑^{ちかみち}なるに如かずと一魁芳年子が筆妙自由の画權を乞ひ肖逼^{せうやくとうわつ}圖活の圖象をもて童蒙婦女を覲^{あは}べしめつゝ誘導の一助ならめと……

……とある。新聞錦絵創刊の趣旨、狙いをよく語っている。つまり、新聞の文章の説くところだけでは難解で婦女童蒙——江戸時代以来の庶民層の読者——には理解できないので、分り易く挿絵を工夫して面白く分らせようというのである。瓦版や草双紙の手法によって新聞の文章を絵解きしたのである。新聞錦絵では芳幾と芳年の活躍が目立つが、特に芳幾は新聞錦絵総数二百前後の中で半数以上を書いたといわれる。⁹⁾

芳幾や芳年は新聞の三面記事を材料にして世相を描いた。幕末、明治に新しく出現した新聞を浮世絵として絵解きしたのである。新聞錦絵の画面から受ける印象は一見したところ絵と書き入れの文とが一体となつて草双紙の紙面を想わせる。しかし、作者の稿本の下絵を版下に完成する草双紙の画工の場合とは違つてこの絵は芳幾や芳年が新聞記事のイメージを直接描いたものであろう。また、書き入れの文章も輕妙な戯作調の明文で山々亭有人、転々堂主人（高皇藍泉）以下の戯作者が書いているが、しかし、元來は新聞の報道記事の文章があつた訳で、それをアレンジ、脚色して画面の余白に書きこめばよかった。絵組みを中心とする稿本を作成した草双紙の作者の場合とは大いに異なるのである。新聞錦絵においては絵師も文章の書き手も草双紙の場合とは異なる役割を担当した。芳幾や芳年にしてみれば新聞の三面記事があれば、残酷、滑稽、あるいは珍らしい場面をどの様にでも錦絵にすることが出来た。新聞記事によって市井の事件を挿絵とする絵師が誕生したのである。また、文章の作者も新聞記事を参考にして専ら事件を報

道する戯文の作成に専念すればよかった。江戸時代以来の絵師と戯作者の伝統が新聞を媒体として報道の画家と記者として新たに展開してゆくこととなった。新聞錦絵はこの様に浮世絵師と戯作者の力をかりて庶民層の読者の数を確保したのである。

この新聞錦絵の流行をみて、その流行の中心であった絵師・落合芳幾、および高島藍泉（三世柳亭種彦）が創立したのが前述した平仮名絵入新聞であった。新しい印刷媒体である活字に江戸以来の浮世絵の版木を組み込んだ絵入り新聞である。

仮名読新聞や東京絵入新聞など当時の小新聞の新聞社は小規模で

出雲町へ移轉してからの仮名読新聞社は間口が三間ばかり、奥行が五六間、階下左方の一室が事務会計広告掛の事務室——人員僅かに四名——其右方の入口に土間があつて、階下の奥もすべて二間で、茲が印刷工場に充てられていた。階上の西側即ち道路に面した方に十二畳ばかりの畳敷の一室があつて、茲が編輯局、其奥の板敷の處が植字場であつた。（篠田鑛造著『明治新聞綺談』44頁。野崎左文の文による）

東京絵入新聞社も主筆格の前田健次郎と染崎延房（二世為永春水）、古川精一（魁雷子）と三品蘭溪翁の四人であつた。末広鉄腸も曙新聞の編輯局について

……曙新聞は七八畳敷にて、記者は余（末広氏）を外にして翻譯掛一名雜報掛の老人一名校正兼編輯の補助一名と出省方と称し諸官省へ布告を貰ふて来る下等の探訪者二三名に過ぎざりしなり……中略……当時の曙新聞は今日の新聞紙の半截に少し広くして白紙に文字がバラツと並んである様な体裁にて短き論説の外に雜報の十件か五件もあればそれで紙上が填まる程なれば記者少なければ職務は至って暇なり……（『明治新聞綺談』49頁。末広鉄腸の文による）

と小新聞の編集の実態を説明している。平仮名絵入新聞（東京絵入新聞）など小新聞の編集は皆この曙新聞と同様であったと思われる。平仮名絵入新聞は前述の様にこの雑報記事中の一つ——最も読者の興味をひくと思われるものを絵入りとした。この部分だけをみれば前述した「新聞錦絵」である。小規模、小人数の新聞社であるだけにこの絵入り記事に関しては社主、落合芳幾の働きを重視したい。先ずニュースのイラスト化が速かに芳幾によって行われ、これに戯作者——高島藍泉、染崎延房——が、草双紙などの戯作で鍛えられた文章を添えて読者に提供した。

この紙面の印象は新聞錦絵、また草双紙合巻と似ている。しかし、作成の過程は戯作者による稿本（絵も文も、その大ききの指定やレイアウトもカットの挿絵や目次の体裁までおよそ印刷されるものすべてを正確に表示した種本）が前提となる草双紙とは異なり、むしろ浮世絵そのものの制作と似ている。絵師が直接、世相を描写したと考えられるのである。戯作者の稿本に依存せず、また、作家の文章にあとから添える現在の挿絵とも勿論異り、先ず絵が出来たのである。

四 明治合巻について——『鳥追阿松海上新話』の問題点——

小新聞の続き物は読者に歓迎された。その中で特に人気のある続き物は脚色を加え増補し編集して草双紙合巻として速成、刊行された。新聞記事を材料とした錦絵を新聞錦絵と呼ぶのになぞらえれば新聞合巻、続き物合巻と称するのが相応しい。これが明治期の合巻の特色となった。続き物の連載記事としての人気と、それが伝統的な草双紙合巻の形態に増補、脚色可能である点とが草双紙の版元（出版社）に注目された。その第一号が『鳥追阿松海上新話』であった。

本書は草双紙合巻、三編（初編—三編）、九冊、丁数は各九丁、仮名垣魯文閱、久保田彦作、陽州斎周延画で明

治十一年二、三月に錦榮堂から刊行された。前年の明治十年十二月十日、仮名読新聞第五百四十号からこの明治十一年一月十一日第五百六十二号まで十四回にわたって雑報欄に連載された毒婦「鳥追お松の傳」を草双紙合巻に仕立てたものである。梗概を記してみよう。

〔梗概〕

前編——（上巻）木挽町采女が原の非人小屋に住む母娘、お千代と阿松は正月は鳥追い、平常は門付の芸人として暮らしていた。慶応の末、維新の徴兵隊の兵士である浜田正司という人物が阿松を見染め縫瀬を重ね、母娘共謀して籠絡して二百円余まきあげる。この噂が上司に洩れて浜田は禁足の刑を受ける。阿松は同じ非人仲間の大坂吉と恋仲であつたが、一方、浅草並木町の呉服店の番頭忠蔵が阿松に慕れこみ通つていた。ある時、主人から預つた商売の決算の金二百両を運ぶ途中、阿松の家へ立ち寄り同食したところへ、不意に大坂吉が現れ密夫呼わりして庖丁逆手に忠蔵を刺そうとする。（中巻）この争いを調停したお千代の策略にだまされて忠蔵は主人の金の中百両を出して命乞いする。実はこの一件はお千代が阿松と大坂吉と共謀した美人局の芝居であつた。浜田正司の件が其筋へ聴えたので危険を感じてお千代は明治二年二月初旬、阿松と大坂吉を大坂へ旅立たせた。二人は品川の東海禅寺の非人仲間、安次郎宅に泊まつたが、安次郎は褒美の金ほしさに二人のことを取締所の分営へ注進する。阿松は逃げたが、大坂吉は捕縛され、翌明治三年二月、三宅島流罪となつた。一方、松屋の手代忠蔵は百両使いこんで主家へ戻られず、死んで言訳しようとして品川の八景坂で書置残して首を吊ろうとする。（下巻）そこへ偶然、阿松が来かかり、死をとめ、一旦故郷の大坂へ帰る様勧める。二人、三島の宿に滞在したが、忠蔵重い病氣となる。阿松、忠蔵の財布を奪つて逃げようとするを狙っている。ある夜、部屋に盗人が入り忠蔵の財布が盗まれる。二人路銀が失くなって困り果てる。

二編——（上巻）そこへ、甲州屋定次郎という駿州府中の芸者屋稼業と名乗る男が現れ、三十円渡して、阿松を芸

者にしたい、四五日のうちに忠蔵も廓へ引取り世話をする、という。二人は金に窮していたので、阿松は忠蔵を残して定次郎に連れられて去る。(中巻) しかし、定次郎は実は甲府無宿根方の作蔵という悪漢で、以前から阿松をかどわかそうと計画したので、座敷へ入って財布を奪ったのもこの男、宵に渡した三十円は贖金であった。阿松は興津の宿で駕籠から降され乱暴されそうになる。お松、松の木の小枝にすがって逃げようとする。作蔵追う。阿松、海に落ち遠州灘の外海に流される。この日は明治二年十月廿日のことであったが、恰度、東京の廻漕丸という蒸気船が通るから、端船をおろして阿松を救い上げた。船が神戸に着くと阿松は所持した忠蔵の守り袋の臍の緒書を種に忠蔵の実父、大坂心斎橋の足袋屋忠兵衛に引渡してくれと頼む。この親のところに忠蔵からの連絡がないのを見定めてから、忠兵衛夫婦に改めて挨拶し、忠蔵と夫婦の約束を交わし大坂へ欠落ちする途中、忠蔵は亡くなり、その後、作蔵に手込にされたときとまことしやかにいつわる。(下巻) 阿松心の潔白を示すため黒髪を根元から切って差出す。両親はすっかり信用して親子の縁を結ぶ。このとき、障子の内より「大騙りの女待て」と以前、阿松がだました浜田正司が現れ、配下の兵隊が阿松を縛って駕籠に乗せる。しかし、実は浜田正司は今は大坂へ轉任して出世したが阿松を忘れかねて追ってきたのであった。兵隊達は浜田の指示により阿松を駕籠から降ろして去る。そこへ浜田正司が現れ、阿松をひきとり妾にしたいと言う。

三編——(上巻) 明治三年二月となった。正司は阿松のところに寝泊りして本宅に帰らない。妻、安子は夫のため阿松を家に入れようとする。正司は柳橋の芸者といつわって、その年の暮れ阿松を本宅に入れる。阿松の以前の情夫、大坂吉は徒刑百日で放免となり、故郷の大坂へ帰り偶然、浜田の屋敷の既の間問となった。阿松と再会して中間部屋でしのび逢う。(中巻) 忠僕の佐助が二人密会の現場をおさえ咎める。阿松は二人許婚の間柄であったと説明し情を乞う。佐助、二人を許す。阿松は本妻安子を陥れるため正司の手箱から二百円盗み、傍に安子あての実家からの

手紙を落しておく。正司、安子を疑い折檻する。物置へとちこめ縛ってやぶ蚊にせせらせる。忠僕佐助、縄をとき安子を逃す。（下巻）佐助、安子を逃したので咎められ物置につながれたが、その夜、舌かみ切って死ぬ。浜田はこの佐助の横死を其筋へ届けなかったので免職となり、他にも多くの罪があるので檻倉に拘留される。逃れぬところ舌くち切って死ぬ。阿松と大坂吉は正司の金を奪って欠落ちする。明治三年十二月、津の国の麻耶山の麓の雪の中で鉄砲かたげた獵人と会う。これは根方の作蔵であった。作蔵は阿松を奪おうとし、大坂吉と格闘となり、大坂吉は谷底へ落ちる。お松は作蔵の言いなりになって隠れ家へ着く。すきをみて鉄砲で作蔵を討つが、失敗する。作蔵、お松を切ろうとするところへ大熊一正現れ作蔵をかみ殺す。阿松も熊に追われ谷底へ落ちる。阿松は通りかかった旅僧に救われる。これまでの罪を懺悔し、煩惱の絆を絶つため火器を頼へ押あてて顔をくずしこの旅僧の庵にかくまわれ二年間過す。しかし、悪癖は直らず、和尚の居間の簞笥から金を盗む。檀家集まり村外れから打擲して追出す。一方、松屋の手代忠蔵は蒲原の旅宿で死にそうになったところへ忠蔵の父が泊まり合わせて助ける。主家松屋へ行って忠蔵、先非を悔い、再び仕事に精出して暖簾を分けて貰った。ある時、千住でお松の顔は焼けただれ、打疵で黒紫に腫れ上った哀れな姿に出会い、五円のを恵む。阿松は母お千代の許で、その金で治療したが効き目なく、明治十年二月九日、狂い廻って死んだ。

「……遙かに過去し明治元年の春よりして同十年の冬に止る温故知新の大実録題して海上新話と号け……」（初編、自序）とある様に新聞記事をもとに鳥追阿松の一代記を書いたもので本文に示されている「慶応末」より「明治十年二月九日」の狂死に至る実録としている。本書刊行と同年、明治十一年六月から十一月にかけて『夜嵐阿衣花廻仇夢』が「さきかけ新聞」第三百二十号（本年五月二十八日）以来の記事によって合巻に仕立てられ刊行されている。

しかし、この方は明治五年二月二十日に処刑、晒し首にされた原田キヌの実録で五年以前の話であるのに対して『鳥追阿松海上新話』の方は前年の明治十年二月九日の阿松の死を、早速、新聞また合巻で取上げたものである。「海上新話」としたのは二篇中巻、漂流した阿松が遠州灘の海外で東京の蒸汽船に救われる場面を題名としたので蒸汽船やボート、水兵などに文明開化期の新味をみせている。主要な人物である浜田正司は徴兵隊の兵士、のち奥羽の役に従軍し、浪華の重役となったという新政府の軍人である。最新の雑報記事を基に、時には日付も明かにして、明治初頭の時世粧を描いたのがこの合巻が評判をとった原因であろう。

この「鳥追」は明治九、十年頃、東京府によって禁止されている。本書二編の序にも「新年告る鶯の、先を払ひし鳥追も、今は昔の春とぞなりける」(明治十一年一月 仮名垣魯文叙)とある。東京府廳の布達、明治九年に「○甲第五百十一號 十二月八日 府下從來之習慣ニテ萬歳又ハ厄拂ヒセキゾロ抔ト唱ルモノ詮議之筋有之自今禁止候條此旨布達候事」とあるのがこれに対応する様である。篠田鉦造氏が「この十年の正月、東京府廳が女太夫、鳥追といふ名称のものを禁じて江戸時代からお正月の景物であつて、編笠を被り紅い紐で、クッキリ白い||白粉を塗立って二重腮の所を結んだ可愛らしい娘の女太夫、チャチャラカチャンと賑やかな三味線を弾いて来たものゝ編笠姿を禁じたので、營業を差止めた譯ではなかったと見え、編笠を廃して、白く塗立てた顔で、不相変市中を賑やかにしてゐましたが……」(『明治新聞綺談』九七頁)と述べているのもこの布達に基づくものであろう。この作品には街頭から消えた鳥追の風俗を阿松の死に託して哀惜する氣持が感じられる。江戸の終焉を新しい時代の急速な移り変りの中で描いたもの、毒婦ではあつてもその死には一抹の哀れを感じさせられる。この合巻は評判となり、早速明治十二年五月大阪の戎座で「鳥追阿松海上新話」という合巻そのままの外題で上演された。

この合巻は、はじめてルビ付き漢字を使用した読む合巻、明治式合巻の元祖、と言われている。その点について二

三述べておきたい。

本書がルビ付き漢字を使用していることは明瞭だが、しかし、この点を、読む合巻、明治合巻のはじまりとして積極的に高く評価するについてはいささか躊躇される点がある様だ。第一点は絵と文との極端なズレである。二三の例を示そう。前編上冊の五丁裏・六丁表に阿松と同食した忠蔵を大坂吉が出刃包丁で刺そうとする次第を述べた本文があるが、これに対応する挿絵は前編中冊の二丁裏・三丁表である。つまり、上冊の本文を読みながら中冊の挿絵をみなければならぬ。二編中冊五丁裏・六丁表に阿松が海中へ落ち、蒸汽船から降されたボートに救い上げられる件の説明本文があるが、これに対応する挿絵は二編上冊の五丁裏から八丁表にかけて描かれている。つまり本書の題名の出処となったこの大事な場面は本文は中冊、絵は上冊に分れている。三編上四丁裏・五丁表に妾の阿松が浜田正司の本宅へ引取られる本文があるが、その挿絵は二編下冊の五丁裏・六丁表である。かくして本書は三編九冊（各冊九丁）の中で同一紙面で文と絵とを同時に鑑賞出来る箇所は三編下冊中の四、五場面だけである。元来、草双紙は絵組みと書き入れの本文が相連携して鑑賞出来る様、作者の稿本が作られている筈である。長篇の場合、絵と文とに一、二丁のずれが生じることはあっても本書の様に絵と文とが別冊に離れていることはなかった。稿本がある以上、考えられないことである。書き入れのストーリーを読みながら絵をみるのが合巻の、というよりも亦本以来の草双紙の伝統だとすれば、本書は一体どのように鑑賞すればよいのだろうか。本書の作成過程には稿本が存在したのかどうか。様々の疑問が生じてくるのである。

第二点ははじめてルビ付き漢字を使用した読む合巻という言い方に何か積極的な評価が含まれている点も気になる。あのべったり、みみずが這った様に細字の平仮名を書き入れた草双紙版本と較べれば本書の書き入れの本文は目新しい。そこに読む合巻たらしめようという工夫があったのだろうか。そうは思えない。しばしば説いてきた様に新聞

記事の文章を利用するところからくる自然の結果だったのでなかろうか。本書の語彙、文体は新聞の雑報欄の文章とほとんど変らない。むしろ、そのことの意味を考えるべきではなかろうか。

新聞の文章——漢字、仮名まじり文——をすべて平仮名書きにすることは、全面的に文章を書き改めない限り、語彙、漢字の問題があつて不可能である。無理に機械的に仮名書にすれば異様な意味のとりにくい文章になるだけである。この点で思い合わせられるのは、嘉永元年から時を同じくして刊行された『雪梅芳譚犬の草紙』（笠亭仙果作、三世歌川豊国画。別名、八大伝犬の草紙）と『仮名読八大伝』（二世為永春水作、歌川国芳画。）である。いずれも曲亭馬琴の『南総里見八大伝』を合巻に引き直した作で読本抄録の流行をつくり出し、補助の作者、画工の協力を得て明治期まで続刊された。学識、文章とも江戸時代の第一人者である馬琴の読本の文章を人気作者である笠亭仙果（二世柳亭種彦）や二世為永春水が草双紙合巻の書き入れの文章に仕立直したのである。その時、彼等は馬琴の漢文訓読式の文章をすべて仮名書きの草双紙の文章に直すために様々の工夫をした。この点について石川了氏は次の様に述べている。

……原書の文段を努めて変更しないようにとの版元の注文ではあつたが、読本を草双紙の性質や読者の相違を考えて、平穩のうちに語らい合う部分や英雄の論弁等は切り捨て、原書漢語も平仮名になおしては意味が理解しにくくなるため、多く耳近な俗語に書きかえている……（日本古典文学大辞典「雪梅芳譚犬の草紙」の項、解説）

読本の抄録に際して笠亭仙果や二世為永春水は、時代考證を伴う画組みを工夫すると同時に草双紙の読者のためにこれだけの周倒な配慮をして分り易い仮名文を作成したのである。この様な読本抄録ものとの対比で言えば『鳥追阿松海上新話』は小新聞の雑報欄の文章を、多少の整理を加えるだけで、ほとんどそのまま使っている。また、同種の文章で増補、潤色している。全文仮名書にしようとも思わなかつたし、その必要もなかつた。

本稿でこれまで説いてきた様に「平仮名絵入新聞」の絵入り雑報欄の報道文に始まる小新聞の雑報記事が流行、発達し、多くの庶民層の読者を獲得していた。これは江戸庶民に人気のあった戯作者や浮世絵師が新時代の新聞界で活動し、小新聞のために、また江戸以来の草双紙の読者層のために分りやすい報道文や挿絵を書いて新聞を普及したことに起因する。

抑、『鳥追阿松海上新話』はこの小新聞の雑報欄の続き物に依った合巻であった。新聞の文章を再録し、追加し、同種の文章で大いに脚色を加えて刊行すればよかった。読者は小新聞の読者と重なることが想像される。高島藍泉（三世柳亭種彦）、染崎延房（二世為永春水）等の雑報記者としての文章の工夫は総仮名書の草双紙を読んだ江戸の読者層とは一味違った新しい小新聞の読者層を開拓していたのである。『鳥追阿松海上新話』のルビ付漢字使用に関しては先ず新聞記事との関係を考えるべきであろう。

五 明治合巻について——『東京奇聞』と『高橋阿伝夜刃物語』——

江戸伝来の草双紙合巻は明治十六年頃まで刊行され二十年には全く途絶えた。（石川巖著『明治初期戯作年表』）それらの作品の中で新聞雑報記事を合巻に仕立てた作は明治期の最も顕著な特徴を示している。以下、『鳥追阿松海上新話』に加えて、同じく新聞種の『東京奇聞』と『高橋阿伝夜刃譚』について述べ、明治合巻の背景を検討してみたい。先ず両作の解題を記す。

『東京奇聞』初編―七編（各編三冊、各冊九丁）は芳川俊雄閣、岡本勘造作、桜齋房種画で明治十二年二月十一日から四月十五日にわたって刊行された。版元は鳥鮮堂・網島亀吉である。

毒婦高橋阿伝は、この年一月三十一日、東京裁判所において断罪申付けられ同日処刑された。東京新聞は翌二月一

日（五百二十八号）よりおでんの一代記を連載し始めたが、新聞紙は散逸しやすく、伝記も連載では切々で読みにくいたので新聞記者の丹精の記事を残すために冊子に仕立て挿絵を加えた……と初編の序文（芳川俊雄）にある。しかしこの出版は実は後述する『高橋阿伝夜刃譚』と競合して行われ、七編の序文（芳川春涛）にも「類板の世に出るを以書肆発兌を急ぎ全部七帙僅か六旬にして業を卒ふ」と述べている。新聞の雑報記事による際物の合巻として両者出版のスピードを競ったのである。

『高橋阿伝夜刃譚』初編―八編（各編三冊、丁数は初編中、下冊の八丁以外は九丁）は仮名垣魯文作、守川周重画で明治十二年二月十三日―四月二十二日刊。版元は金松堂・辻岡文助であった。本書は初編の本文は活版刷り、他は初編の図版、二編以下すべて木版である。

毒婦高橋おでんは明治九年八月二十六日夜、浅草御蔵前の旅人宿で後藤吉蔵を殺害した罪で捕えられ明治十二年一月三十一日、東京裁判所にて斬罪申付けられた。仮名読新聞（社長は仮名垣魯文）は翌二月一日、二日とお伝の悪業を報ずる連載記事を出したが四日には連載を中止して絵人読本（合巻）として出版する旨断っている。これは岡本起泉の『東京奇聞』出版への対抗処置であった。

同じ高橋阿伝の事件を描く両作が競争して刊行された訳だが、この競合の中で『高橋阿伝』の方は「記者曰く……出版者発兌のすみやかなるを欲するより活字を以て行をなせば……」（初編下冊）とある様に鉛活字で印刷しようとした。本書の初編は活字印刷の丁（頁）と木版の図版の丁とをち合せた新形態であった。図版は上冊（九丁）の中間で見聞き三場面、片面一場面（一丁裏・二丁表、二丁裏、五丁裏・六丁表、八丁裏・九丁表）。中冊（八丁）は見聞き三場面（一丁裏・二丁表、四丁裏・五丁表、六丁裏・七丁表）。下冊は見聞き三場面（一丁裏・二丁表、四丁裏・

五丁表、七丁裏・八丁表）。但しこの図版は本文と同じ活字印刷のインクを使用した為か色が普通の木版本と異り異様である。初編は速成されたが問題が多かった。金属活字を組む為「字句の間ひ毫毛も透なく一行三十七字、一丁の字数八百八十八字現今坊間に流布する絵上畫上加入の草双紙三冊物とは異りて所謂読沢山の冊子といふ可し、然れども本文挿絵に遅れ連合の全きを得ず是なん絵の彫を前にし活版後になれるを以ての齟齬なり第二編より記者注意して畫と本文と照対するを要とす可し……」（同上）とある様に紙面一杯に活字を組むため、本文の分量が多くなり、それだけ長文の原稿を、しかも、急いで作成しなければならぬ。普通の版本の草双紙の稿本で下絵の上部や余白に書き入れの文章を書きこむのと違って「読沢山の冊子」で、作文に骨が折れる。また、木版の草双紙が作者の稿本に依存するのと異り図版の丁（挿絵だけ）が先に出来て、本文だけの丁の作成と別なので「連合の全きを得ず」絵と文の連携が巧く行かない。

草双紙の作者が稿本を作成する場合は絵組みとその書入れ——ストーリーと会話文——の両者で場面を構成し絵解きをしつつ物語を進めてゆくのに対して、この様に図版の丁と本文の丁が別々になると文章の部分は文章だけで分量の多い読物を作成することとなり、また図版だけの丁との連絡が失われた。さらに、第二編の中冊の序によると初編は「校合甚だ龜漏にして殊に第三の巻八丁目（最終丁—本田注）は記者目分量少しく違ひ活字一行餘れるを印工の杜撰その事を記者にも告ず霧閣夢中に文を縮め仮名を漢字に換えたるを以て結局文を成さず……」と述べている様に校正上の誤まりもあった。この様な理由で本書は第二編よりはすべて木版、つまり江戸の草双紙の作成法に戻ったのである。尤も木版ではあっても速成のための工夫をこらしている。

……此草紙第二編は梓元^{はんもと}他より出る類本に先立つ発兌^{うただし}の速かならんことを欲するより画工^{あかし}は二名を以てし傭書生^{ひつかうかし}も又二名に托し記者の草稿^{しんかき}を切斷^{きれく}にして板下僅かに一昼夜に成り彫も又三日を待たず故に校合を記者に乞はず製

本成れる後披閱して其^そ艱^{がた}雜に駭けども甲斐なし（第三編、下之巻、序）

稿本をばらして筆工、画工が手分けして版下を速成する有様が述べられている。この方が金属活字の印刷よりは速かつたのである。⁽¹²⁾『高橋阿伝夜刃物語』は草双紙合巻にはじめて活字印刷の技術を導入して速成しようとした努力と失敗の作であつた。世は急速にスピードと量産の新時代を迎えたのだ。

以上、『鳥追阿松海上新話』『東京奇聞』『高橋阿伝夜刃物語』など新聞種の合巻に特徴をみせながらも明治合巻は急速に衰退の途をたどつた。これは時勢の流行の然らしむるところといつてしまえばそれまでであるが、明治十年代、特に明治十三年からの小新聞の続きもの（絵入りの連載もの）の盛行をみると、（高木健夫著『新聞小説史年表』昭和六十二年五月三十日発行、国書刊行会）新聞の続きものに読者を奪われたことが考えられる。新聞記事を利用した合巻が逆に新聞に吸収された感じである。前述した新聞錦絵の場合も事情は同様であつた。新聞錦絵は明治七年頃急速に流行した。前述した様に新聞の雑報記事が難解なのを一恵斎芳幾等の浮世絵と戯作者の軽妙な文章で絵解きして、庶民層の読者多数を獲得したのだ。しかし、僅か一、二年で急に衰退した。その理由として高橋克彦氏は「生まれるキッカケを作つた新聞の普及が新聞錦絵の衰退を招いた」とされ、特に明治八年四月の『平仮名絵入新聞』の創刊を強調される。

……これは文字通り絵を主体として、記事を「ひらがな」でつらねた新聞である。もちろん新聞と銘打っているからには、新聞錦絵のような後追い記事ではない。それに文字の読めない人々にも分かりやすいやうに工夫してある。まさしく新聞錦絵の長所と新聞のそれとを合体させたアイデアだ。この新聞は発行されると東京日々に迫る勢いでみるみる部数を伸ばした。……（高橋克彦著『新聞錦絵の世界』——高橋克彦コレクションより——昭和

和六十一年十月三日発行、PHP研究所）

この「平仮名絵入新聞」の流行によって明治八、九年をピークにして新聞錦絵は凋落の途を辿り、同十二、三年にはほとんどみられなくなる。

このことは『鳥追阿松海上新話』以下の、新聞種の合巻の衰微についてもいえるのではなからうか。小新聞の絵入り雑報欄が人気を呼び、連載記事の続き物が流行して小新聞の発行部数が増大し、新聞の続き物を読む習慣が庶民層の新しい読者の間に確立した。その時、新聞種の草双紙合巻を鑑賞する習慣は棄れていったのではなからうか。

続き物は、その形態は草双紙と同様、絵を中心とし、書き入れの文章で取り囲んで絵解きを試みる文芸である。江戸以来の浮世絵師や戯作者が筆を執っただけに特に草双紙合巻また人情本、読本を読みなれた庶民の読者層には親しみ深かった。前述した「金之助の話説」（東京絵入新聞。明治十一年八月から九月にかけて掲載）にしても、勘道された金之助が大阪へ出て成功しようとして苦勞する話はこの明治の新時代に起った実際の事件のニュースとして三面に記事に掲載されたが実は『梅暦』の丹次郎ならぬ明治の金之助が江戸の芸者小蝶と大阪芸者小龍に同情され助けられる話で、東京の小蝶から来た手紙をみて小龍が嫉妬するところが全編の山とみてよい。結末は勘道がとけた金之助が小龍と礼を厚くして別れ、小蝶を妻としてめでたく終っている。本妻と妾にめでたく収まって三角関係が解決するという人情本の定跡に従ったのである。続き物はこの様に三面記事の事件の報道を戯作風の物語に仕立てて絵入りで毎日、連載、速報したのであって、これが流行し普及すると『高橋阿伝夜刃物語』の様な新聞種の合巻は棄れていった。草双紙合巻はやはり草双紙として作者が独自の構想で絵組みと文章を作った稿本を工夫しなければならなかったのである。しかし、そうは言っても、江戸以来の方法による合巻も一方で出版されていて、それも明治十六年から二十年にかけて消滅した。時勢というしかない。新聞種の明治合巻は末期草双紙合巻の最後の火花ともいべく、新聞記事を利用した際物の読物として短期間栄えたが、恰度、新聞錦絵が短命であった様に二、三年で新聞の続き物に吸

収されてしまった。

草双紙合巻は、かくして、式亭三馬が『雷太郎強悪物語』（初代歌川豊国画、文化三年、一八〇六年刊）を考案してからこの明治二十年（一八八七年）まで約八十年間で滅んだ。しかし、以上述べて来た様に明治初頭の文明開化期に新しく生じた小新聞の活字印刷の中で続き物として変身して生き続けた様である。浮世絵師や戯作者が新聞の挿絵画家や雑報記者となり、なによりも江戸期以来の草双紙の読者層が小新聞を購読して続き物、つまり後の新聞小説を読む様になったのである。

六 付録——新聞小説の形態

続き物、後の新聞小説の形態は明治初期から百年後（合巻の歴史より長い）の今日までそっくりそのままである。この日本の新聞小説の形態、つまり、絵入りの続き物は国際的に珍らしい——韓国の新聞小説がほぼ同種であると聞く——形態であるらしい。しかも我が国においては中央紙、地方紙、どの新聞の朝刊にも夕刊にも小説が載っている。大抵、社会面、三面記事の一、二頁前位、最下段——といっても、広告欄の上——を大きく占有して、どの新聞小説も形態は全く同じである。同じ顔をしている。作者名と並んで画家名——これが珍しい——二段組み、中には一段組みがあるが、小説の本文はいずれも全スペースの三分の二、中央の三分の一は挿絵である。実に堂々たる挿絵。紙芝居文学、絵解き文学というべきか。明らかに挿絵が主、文章が従である、と言っても大きな反論はあるまい。しかし、挿絵が主であるといっても、明治以来の日本文化における新聞小説の作家の重さを想う時、この発言は取消しておいた方がよいのかも知れない。ただ、挿絵のスペースの広さが、その位置づけが何としても気になるのである。

完結して単行本になるとときには挿絵は大部分が抜かれる。もっとも新聞小説の挿絵は毎日眺めてその日のうちに忘

れるその場限りの性質のもの——あるいは小説本文の方も程度然り、続き物の宿命である——であって画家にもよるが単行本に新聞小説の挿絵を全部出されたらその異様さは到底、鑑賞に耐えるものではない。私のささやかな実験の結果に照らしてもその日の勤めを終った切抜きをスクラップブックに葬るのが最も妥当な扱いの様だ。本稿は日本の新聞小説のこの異様な形態について、特に挿絵に注目して浮世絵、草双紙、また文明開化期の小新聞との関係をあらあら調べたものである。

蛇足を付しておけば、新聞小説の挿絵も、時代物（歴史小説）の場合は、考証に基づく風俗画など絵巻物以来のよき伝統が考えられる。すぐれた絵解きの効果が期待される。問題は散文による極限の表現を目指す現代文学の場合である。音楽や絵画、彫刻と並んで言語の芸術として独自の表現活動を行うに際して、毎日その挿絵を付すことが可能なのだろうか。たまたま本稿執筆中、新潮社の『波』十一月号を貰ったので散見したら、小林信彦氏が次の様にはつきり所信を述べている。

新聞小説が読まれなくなったのは、花瓶とか模様とか、わけのわからぬヘイラスト¹が、毎日のつっているからでもある。そんなへ模様風イラスト²入りの文章など誰が読むものか。

新聞小説の絵は、ストーリーを、より理解し易くするためのものである。成功例をあげれば、「宮本武蔵」の石井鶴三、「澤東綺譚」の木村莊八で、すべて、物語の視覚的説明なのだが、画家の才能によって、そうした枠をはみ出してしまった。（新聞小説の効用Ⅱ、三十頁）

新聞小説の歴史を考えながら私はこの小林信彦氏の意見に全く同感であった。それにしてもこの新聞小説は毎日発表され続けている。挿絵付現代小説、現代文学の絵解きは可能なのだろうか。日本の新聞小説はこの様な問題をふくみつつ堂々と存在している。これは日本文芸の世界に誇るべき絵巻物以来のユニークな伝統を示すものであろうか。

あるいは、はしなくも日本文化の江戸期以来の近代化になじまない恥部を露呈しているのだろうか。本稿はこの形態の直接の源流が明治のはじめ小新聞の三面記事の報道に取こまれた挿絵に発し、更に溯れば草双紙合巻や瓦版の紙面（挿絵）がこの形態に一致することを指摘するに止める。

注

（１）『転換期の文学——江戸から明治へ——』（早稲田大学出版部）『明治開化期文学の研究』（桜楓社）など。近著『新聞雑誌発生事情』（角川選書 76）が人手し易すい。このテーマについての草分けの調査研究として参考にすべきである。

（２）明治八年四月十七日、第一号刊。隔日出版。タブロイド版四頁の所謂小新聞。明治九年三月「東京平仮名絵入新聞」のち「東京絵入新聞」と改題。社主、落合芳幾、印務編輯長代理、高島藍泉。東京銀座一丁目十番地、絵入新聞社刊。この新聞の雑報記事については後述する。

（３）明治期から草双紙合巻は一冊九丁となった。以下も同様。

（４）『高橋阿伝夜刃譚』は「仮名読新聞」の二月一日、二日、四日、『東京奇聞』は『東京新聞』の二月一日（五百廿八号）より連載。

（５）小野忠重著『版画——近代日本の自画像』（岩波新書四一一）五八頁

（６）挿絵の上部には草双紙の書入れと同様、雨だれ式に記事本文が印刷されている。

（７）明治九年一月四日（第百六十三号）に左の記事がみえる。

「草双紙にてお馴染の為水春水 三千万余のお客さまがたエ ○絵入新聞の売初に為水さんの人社を祝ひて 世乃人の為ながかれと山の井の浅きを汲める春の水茎 横浜神奈垣魯文」

(8) 坪内逍遙が「……因云。此間の傍訓新聞紙に掲載せる所謂統計話の雑報の如きは、おほむね草冊子の文章なれども、多少の改良を如へたるものなり。……」（『小説神髓』文体論、第三雅俗折衷文体、乙）と述べている雑報記事の文章の工夫は高畠藍泉、染崎延房にはじまるのであろう。

(9) 高橋克彦著『新聞錦絵の世界——高橋克彦コレクションより』（一九八六年、PHP研究所発行）は著者所蔵の芳幾作の多くの新聞錦絵を紹介し、新聞との関係、絵師、戯作者についての研究、解説が掲げられている。このテーマに関して独力で達成された貴重な業績で参考にするべきである。

(10) 「東京市史稿市街篇第五十八」にも収録。この辺のことについては東京都公文書館の片倉比佐子氏の御教示を得た。

(11) 書名は初編の内題のみ「……夜叉譚」

(12) 明治合巻で全編を鉛活字版で印刷した最初は本書と同じ明治十二年に本書に半年おくれて刊行された『巷説兎手柏』（高畠藍泉著、一恵斎芳幾画）であった。この作品の成立、文体等については別稿を予定している。

本稿で扱った明治の新聞に関しては東京大学明治新聞雑誌文庫所蔵のもの、国立国会図書館新聞閲覧室のマイクロフィルム、また明治の草双紙合巻については主として国文学研究資料館の蔵書を調べた。付記して謝意を表した。